

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第189号

イザヤ 65:1

平成23年6月24日

主がイスラエルをダビデの家から引き裂かれたとき、彼らはネバテの子ヤロブアムを王としたが、ヤロブアムは、イスラエルを主に従わないようにしむけ、彼らに大きな罪を犯させた。イスラエルの人々は、ヤロブアムの犯したすべての罪に歩み、それをやめなかったので、ついに、主は、そのしもべであるすべての預言者を通して告げられたとおり、イスラエルを御前から取り除かれた。こうして、イスラエルは自分の土地からアッシリヤへ引いて行かれた。今日もそのままである。アッシリヤの王は、バビロン、クテ、アワ、ハマテ、そして、セファルワウムから人々を連れて来て、イスラエルの人々の代わりにサマリヤの町々に住ませた。それで、彼らは、サマリヤを占領して、その町々に住んだ…バビロンの人々はスコテ・ペノテを造り、クテの人々はネレガルを造り、ハマテの人々はアシマを造り、アワ人はエブハズとタルタクを造り、セファルワウム人はセファルワウムの神々アデラメレクとアナメレクとに自分たちの子どもを火で焼いてささげた…彼らは主を礼拝しながら、同時に、自分たちがそこから移された諸国の民のならわしに従って、自分たちの神々にも仕えていた。彼らは今日まで、最初のならわしのとおりに行っている。彼らは主を恐れているのではなく、主が、その名をイスラエルと名づけたヤコブの子らに命じたおきてや、定めや、律法や、命令のとおりに行っているのではない…このようにして、これらの民は主を恐れ、同時に、彼らの刻んだ像に仕えた。その子たちも、孫たちも、その先祖たちがしたとおりに行った。今日もそうである。 列王記第二 17 : 21-24、: 30-34、: 41

アッシリヤの王はイスラエル人をアッシリヤに捕らえ移し、彼らをハラフと、ハボル、すなわちゴザンの川のほとり、メディヤの町々に連れていった。 列王記第二 18 : 11

北イスラエル王国が背信のゆえに滅びたとき、アッシリヤが取った悪徳政策は、イスラエルの指導者たち、要人を国外追放し、代わりにアッシリヤの指導者を首都サマリヤに住ませ、同時に多くの外国人をバビロン、アラム、ユーフラテス川沿いの地域から移住させ、イスラエル人と結婚させることによって純血部族を根絶し、謀反が起こらないようにすることでした。冒頭に挙げた箇所は、アッシリヤの混血政策によって、サマリヤはじめ、北イスラエル王国の領土に異端信仰がはびこり、ヤーウエを礼拝するかたわら、偶像の神々をも礼拝するという混成宗教が蔓延したことを語っています。背信のゆえに神が投げ捨てられたイスラエルの地は、皮肉なことに、ますます異端信仰に花開くことになったのです。しかし、ここで繰り返されている「今日もそのままである」という言葉は、後世、誤って解釈され、イスラエルの十の部族は追放され、失われた、すなわち「失われたイスラエルの十の部族」という説が生み出され、追放後の部族の移動先を探求する試みがなされて来ました。エルサレムに設立された「アミシャブ」というイスラエルの調査機関は、イスラエル人と認められた人々に無条件で本国帰還の手続きをし、二十世紀以降、アフリカ、ロシア、東ヨーロッパから多くがイスラエルに帰還しています。

先月号で考察したように、憐れみの神は、背信のヤロブアムで始まった北イスラエル王国に預言者を送って何度も何度も悔い改めて立ち返るようにと警告されたのですが、二百十年間、イスラエルの二十人の王たちの一人として民を背信から救い出そうとした者はいませんでした。このように背信で固められた王国は、神が宣言された通り滅びたのです。十部族の中の真の神を恐れる者たちには、この長期にわたる王国の存在期間のいつでも、真のヤーウエ信仰を維持していた南ユダ王国に移るチャンスが与えられており、サマリヤが陥落した 721BCE の時点では、十部族はユダ王国の統治下で存続しており、以降、神の掟に従う十部族の「残りの者」は南ユダの二つの部族やレビ族と生死をともにすることになったのです。イザヤと同世代の預言者ミカが、用語「イスラエル」と「ユダ」を区別しないで、全イスラエルとして語っていることから、当時の国家構成がうかがえます。しかし、聖書は、背信の北イスラエルの指導者たちが追放された後、ユーフラテス川を越えて、新天地を求めて東に向かった可能性を否定してはならず、また、70CE のエルサレム第二神殿崩壊後、全イスラエルが全地に散らされたことを明らかにしています。したがって「失われた」部族ではなく、全国に離散した神の民、全イスラエルを約束の地に戻す試みは無駄ではないのです。聖書は、究極的には、神が全イスラエルを約束の地に戻すことを預言していますから、人間的な徒労は必要ないようにも思われますが、「失われたイスラエルの十の部族」を探求する過程で、非常に興味深い多くのことが明らかにされてきています。

「ハラフと、ハボル、すなわちゴザンの川のほとり、メディヤの町々」、すなわち、トルコ東部のクルディスタン、アフガニスタン北部のアム・ダリア川沿いのハラトやハボルから始まってさらに東に向かううちに、北イスラエルの部族の団は、その途上、アフガニスタンとパキスタンの遊牧民族「パタン族」として、インド北部、チベットの「カシミール族」として、ミャンマーやインドの「メナシュ族」として、また中国の「羌族」としてその地に定着し、最後の集団はカイファン（開封）を経て日本に渡ったようです。これら部族の住みついた地は、中国と西方を結んだ古代の

交通路「シルクロード（絹の道）」上にあり、聖書外典のエズラ記（ラテン語）13：39-50には、おそらくこの集団への言及と思われる出来事が記されています。「……しかし、彼らは、多くの異邦の民を離れて、人がまだたれも住んだことのないほかの地方に行こうと決心した。彼らは、それまでいた地方では守ることのできなかつた掟を、そこで守りたかつたのである……その地方は、アルザルと呼ばれている。彼らは、最近までそこに住んでいたのである。そして今、彼らは再び帰国の途につき……」。このくだりは、458BCE にバビロンからの第二次本国帰還団を率いてエルサレムに移住した祭司エズラに与えられたとして、外典に記されている終末の末期に関する七つのビジョンの六番目で、ユーフラテス川を越えて東方に離散したと思われる十の部族が究極的には来臨のメシヤの許に集められる奇蹟を描いています。「アルザル」は、申命記 29：28 で「ほかの地（地の果て）」と邦訳されているヘブル語で、東の果ての地に太古の昔、イスラエル人集団がたどりつき、背信の結果の国家滅亡という苦い体験をふっしょくして、心機一転、信仰体系の立て直しを図ろうと定着したのが日本であったということは十分考えられることです。

五月に沖縄を訪ねたとき、沖縄に古代イスラエルの足跡が今日も息づいていることに開眼させられました。本土と違って、沖縄には仏教が浸透しなかったことにより、祭壇はあっても偶像が存在しない神道の原初形態「古神道」が民間信仰として根強く残っており、古代イスラエルの信仰形態とキリストの教えが他宗教や儒教などの思想に影響されずに反映されていることを知らされたのです。沖縄のイスラエル性探索はすでに未信者の人たちによっても積極的に進められており、調査結果は、沖縄に古代イスラエル集団が住み、ルーツ、地名、人名、風習にその痕跡が疑う余地なく刻まれていることを明らかにしています。イスラエルでは紀元前十世紀のソロモンの時代、ツロの王ヒラムの支援で、インドやアフリカに向けて船団が送りだされ、世界的な交易がなされていましたが、紀元前一、二世紀頃には、インドシナ半島、マレー半島を経て、エドムの地の銅の精錬技術は日本にも伝えられていたと言います。このように、陸だけでなく、海のシルクロードを通して、イスラエル人が沖縄の南東部の「久高島（くだかじま）」に上陸したことは十分考えられるのです。久高島には菊の御紋があり、天皇家と深いかかわりがあるとされているようですが、エドム人の王ヘロデの紋が菊の紋と似たひまわり紋であることからその関連も指摘されています。

へびが女を惑わしたという多くの物語、神が女を男のあばら骨から造られたという創世記の記述を明らかに反映している「男は肋骨が一本足りないので、女に夢中になると愚かになる」という意味の言葉が那覇地方の人たちの間で交わされていること、出エジプト後の荒野でのマナを思い起こさせる「天から降る餅の話」、洪水神話、塩の柱になってしまったロトの妻を思い起こさせる「後ろを振り返るな」と花嫁に呼びかける結婚式の慣習、過越の祭りを思い起こさせる「島クサラシ」—ほふった牛の血を植物に浸して家の入口や鴨居に塗る「厄除け」—という古来からの風習、沖縄に至る所に「御嶽（うたき）」と呼ばれる自然の崇拜所、聖域や小規模の崇拜所「ウガンジュ」があり、祭祀儀礼が執り行われてきたが、香壇はあっても偶像はないこと、沖縄人は豚肉をよく食べるが、祭祀儀礼に携わった古代のユダヤノロ（祝女）は豚を「汚れた動物」として食べなかったこと、旧暦で行われる伝統的な行事がイスラエルの例祭と一致していることなど、沖縄にはイスラエル性が深く浸透しているのです。太陰太陽暦（旧暦）を用いる沖縄では、十九年に七回「うるう年」を設けて調整するそうですが、これは、ユダヤ暦と同じで、沖縄の旧暦一月の行事と「ニサンの月」を第一の月とするユダヤの宗教暦に従って執り行われる主の例祭との完全な一致は驚くべきです。沖縄の一月は①元旦、旧正月で始まる ②十日は「十日拝み」、十二支祝いがなされ、その八番目は「未（ひつじ）」 ③十四日は正月、「トゥシヌユルー（年の夜、大晦日）」で、正月用豚をほふる ④「島クサラシ」（看過牛）—厄除け— ⑤「マルチャジシ」—煮た肉を中腰で素手で食べる儀式— ⑥正月餅、苦菜を食べる ⑦骨付き肉を食べる ⑧眠らずに夜を明かす ⑨十五日から七日間、小正月を祝うことが定められていますが、これらはすべて、ヘブル語聖書のレビ記 23 章、出エジプト記 12 章に記されている「過越の祭り」に一致するものです。しかし、主食が「米」の日本では、イスラエルの「マツァ（種なしパン）」を餅とみなすことはできるかもしれませんが、一米、餅は膨れ、パン種の効果を表すので、モーセの掟では「種なしパン」とはみなされません—羊の代わりに「豚」が用いられることや肉を焼かないで「煮る」ことには、「彼らは主を恐れているのでもなく、主が、その名をイスラエルと名づけたヤコブの子らに命じたおきてや、定めや、律法や、命令のとおりに行っているのでもない」と列王記の著者が記しているように、沖縄に伝えられた掟の守り方が背信のイスラエルによってもたらされたものであったことを裏づけているといえるかもしれません。また、旧暦一月十六日「ジュウルクニチー」は、「グソー（あの世）の正月」と呼ばれ、重箱入りのご馳走を墓前で広げ、盛大な祝いをするそうです。言うまでもなく、ユダヤ暦の「ニサン（第一）の月の十六日」は、「初穂の祭り」の日で、—キリストが十字架上で亡くなられた週は「大いなる安息日」と「週ごとの安息日（土曜日）」とが続いたため、甦られたのは十六日ではなく、ニサンの月の十七日であった—この日は、復活祭の祝日なのです。また、旧暦八月十五日に祝われる沖縄の「十五夜」は豊年豊作を神に感謝する祭りで、やぐらを立てて村人は踊り続けたと言います。これは、ユダヤ暦の「ティシュリ（第七）の月の十五日」から七日間祝われるイスラエルの収穫祭「仮庵の祭り」と同じですが、一か月遅れの祭りは背信の王ヤロブアムに起因するのです。子牛カルトを設立したヤロブアムは「自分で勝手に考え出した月である第八の月の十五日に、ベテルに造った祭壇でいけにえをささげ……香をたいた」（列王記第一 12：33）のでした。ヤロブアムが祭司職を侵害した王であったことは、次号で考察する神道の特徴と無縁ではないようです。